



つばめ農園おひさま便り

41

安溪貴子・安溪遊地

ニホンミツバチの分蜂

阿東高原は、いまリンゴの花盛りです。西日本では数少ないりんごが特産の徳佐地区には、二〇以上の観光りんご園があります。三月に、中国山地の山腹の白いコブシの花からはじまって、名物の徳佐八幡宮のしだれ桜に続いて、ミツバツツジが咲いたと思つたら、もうフジの花も色づきはじめて、春は目まぐるしく動いていきます。

昨年瀬戸内海に面した富海から巣箱ごといただいたニホンミツバチ（和蜂）は、二つの巣箱のひとつからは、群れがいなくなつてしまいました。もう一つは重箱の三階建てだった巣箱が六階になるほど増え、無事冬越しをして、三月三〇日に分蜂ぶんばうしました。私どもにとっては初めての経験でしたが、巣箱の外側が黒くなるほど蜂たちが出ていたので近付いてみると、その中に、普通の働き蜂より二まわりほど大きい黒い蜂たちがいました。目がとても大きいのですが、これは針をもたない雄蜂なのだそうです。そういえば、数日前から、ご飯茶碗のように真ん中が凹んだ雄蜂の巣房の蓋が巣の下に落ちていました。

分蜂に備えて、巣箱から二〇メートルほど離れたところに、女王蜂を迎え入れる新しい巣箱を作っておきました。中には蜜蝋

を塗り、通販で買った集合フェロモンを巣箱に取り付けました。結果は大成功で、丸一日後には、たくさんの働き蜂が新しい巣箱を元氣よく出入りする姿が見えるようになりました。そして、四月一〇日には二度目の分蜂が起こりました。これは、以前に二〇群も飼っていた和蜂の群れがみんななくなつてしまったという、田んぼの師匠の吉松さんに巣箱をもつて取りに来てもらいました。

分蜂する和蜂たちがたくさん飛び回っている群れの中に人間がいても、まったく攻撃されません。今年も巣をかけたツバメたちもそうですが、野生の動物たちが人間を仲間として受け入れてくれているようで、つい家族のような気持ちで言葉をかけるようになります。

「いのち湧く島・与那国」

風の谷のナウシカのように、身の回りのあらゆる生き物と話ができる人に会われたことはありますか？ 以前（連載一二回）にもご紹介した、台湾の見える与那国島で生まれ育ったN子さんは、そんな人です。幼い頃、ミミズや枯れ葉とお話をしながら遊んでいる様子をお年寄りが見つけて、その力を育てて、島のために活かそうと考え

与那国語と日英3言語のカラー A4 サイズの画文集『むすぶ』の愛読者・先着 20 名様にプレゼント。ご希望の方は、a@ankei.jp にメールを！



たのだそうです。今から三〇年ほど前に、私たちが与那国島を訪問した時に初めてお会いした N 子さん。島ことばや古くからの伝承についても、さまざまな記録を試みてきたと聞いて、共感しながらお話をうかがったのでした。不思議なご縁で、やがて、彼女の幼いころからの記憶や経験を書いたノートが届くようになりました。胎内での記憶や、植物や死者との対話、琉球王国の支配を受ける以前に島にやってきた漂流民との思い出など、「常識」では計り知れないさまざまな内容でしたが、しだいに絵も届くようになって、いつのまにか八〇〇枚以上の絵やスケッチをお預かりするようになってしまったのです。ノートも厚さ一メートルを超える分量になっていました。

四千枚もの与那国語彙カードは、科学

研究費補助金をいただいて「#与那国島の生物文化データベース」として二〇二〇年にインターネット上で公開できました。その後も絵は続々と届きます。なんとか、一般の方にもわかりやすい形で出版できないかと模索してきました。絵にも造詣が深い、サンゴ礁の研究者の渡久地健さん（元琉球大学）が、選んでくださった一〇〇枚ほどの絵をもとに、何冊かの画文集を編む計画を進めました。

昨年の秋から具体的に取り組んできた、N さんの画文集の一冊目は、京都にある総合地球環境学研究所（ちきゅうけん）の LINKAGE プロジェクトの支援を受けて「水といのち」の循環をテーマにまとめることにしました。

『ぬていぬかーら どうなん（いのち湧く島・与那国）』（「てい」は、韓国語の濃音に似た与那国語の発音です）と題して、七〇枚あまりの絵を五つの章にわけて紹介しています。章立ては、「幼い日々」「植物に支えられて」「動物とのかかわり」「祖母の教え」「めぐる水への祈り」としました。ネットでもお読みいただけます。

食べ物でもある生き物たちとの正しいつきあい方、人々が島で生き延びてきた方法、あらゆるものの共存を通じた平和、人間の

出したよごれ・けがれがこの星の水の巡りに乗って星のかなたで浄化されて人間の上に降り注ぐという宇宙観……。N さんが「未完のパズル」という、膨大な記憶は、こうして一冊にまとまってみると、歌と祈りに埋めつくされていたかつての与那国島の暮らしのたしかな記録です。

島に残された小さな森の大きな木々に囲まれて暮らしている友人がいます。この本をお贈りしたところ、以下のような熱い感想が届けられました。お許しを得て共有します。

この本、すごい！この本すごい！すごい！/泣いた 泣いた 泣いた/悲しくないのに涙が止まらない/森にでて、ありがとう ありがとう ありがとう ありがとう 泣きながら叫んだ/小さな声で……/森の樹達が/あなたは純粹/と言った

幸せでしかない。/こんな樹々に囲まれていること。/一ページ一ページを大切に読みたいと思いました。/本当に本当に素敵な本。/出会えたことに感謝しかありません。

（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）

文中の#マークはパソコン検案用です。Artbookのシートをダウンロード。QRコードにスマホをかざすとサイトが見られます。

a@ankei.jp

http://ankei.jp

